

二〇一六年度

二月二日入試

国語 (50分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、2-1 から 2-14 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

惇は正作が五十才を過ぎてからできた男の子だ。惇が成長したある日、正作は惇を連れて七夕用の笹を取りに青煙峠へ出かける。笹もとり終え、帰ろうとしたときに正作が崖から足をすべらせて落ちてしまい、折れそうな松の小枝に右手一本でしがみつき宙づりとなった。正作は惇に助けを呼んでくるように言い、惇は木樵小屋の老人を呼びに必死に走るのだった。

やがて道は下り坂になり前方からせせらぎの音が聞こえた。もうすぐ橋があるはずだ。橋を渡れば小屋はもう近い。惇は足の裏全体でバタバタと坂道を右へ折れながら下って行った。

橋は来た時よりも小さく見えた。惇は橋を渡ろうと板に足をかけた。

すると橋の中央に縄のようなものが見えた。動いている。それはこれまでに見たこともないほど大きな青大将だった。二枚の板を遮る格好で頭を惇の方角に向けて静かに身体を這わしている。惇は立ち止って蛇を見た。蛇は、この橋を渡さないぞ、と惇を睨みつけて頭を動かさない。惇は足が震えるのを感じた。正作の顔が浮んだ。何か棒切れを探そうとしたが辺りに枝も石もない。ズボンを握りしめると濡れたポケットに晴のくれたキャラメルの箱が触った。まだ封を切っていないキャラメルの箱を蛇に向って投げつけた。

が、箱は蛇を避けて空を切って川に落ちて行った。青大将は動く様子も見せず、ますます惇を見据えている。誰かが後方で笑っている気がした。青煙の生き物全てが惇に挑みかかっている。こんなことをしていたら正作は死んでしまう。正作は必死で待っているに違いない。

「どけー、どけー。どけー。」

惇は歯を噛みしめ大声を出して蛇に向って走り出した。橋は小さく揺れた。もう蛇が足首に巻き付いても構わないと思った。左の足に何かが張り付いている気がしたが下を見ずに橋を駆け抜けて雑木林の上り坂を木樵小屋に向った。

小屋が見えると惇は大声を上げて老人を呼んだ。急に涙が溢れて耳や頬に走る度に飛んで行った。

「おじさーん。おじさーん。」

小屋に着いたが先刻そこで薪を束ねていた老人の姿が見えない。小屋の戸を開けると中は暗くて何も分らない。

「おじさん、おじさーん。」

惇はどうしたらいいのか分らなくなった。老人は引き揚げてしまったのだろうか。見ると束ねた薪の束の上に煙草と布包みがある。惇は声を上げて小屋の四方で呼んでみた。しかし惇の叫ぶ声だけが薄暗い林の中に響いて返って来るだけだ。それでも何度も呼び続けた。正作はまだ右手を離さず松の木にいたのだろうか。いる。必ずいる。早くしなければ。正作を思うと涙がまた流れはじめた。声がかすれてしまう。

惇は肩を震わせて辺りの音を偵った。

すると今惇の走って来た川の方から人の歩く気配がした。老人の姿が映った。

「おじさーん。大変だ。おじさーん。父ちゃんが岩から落ちた。早く早く助けてくれ。」

老人は惇の様子に驚いて、

「どうした……。」

「父ちゃんが、父ちゃんが落ちた。」

「どうしたのじゃ。ゆっくり話せ、父ちゃんがどうした。」

「父ちゃんが滝の岩から落ちた。細い木にぶら下って片手で掴まっとる。細いから、木が折れそうじゃ。おじさんと呼んごる。早く、早く、死んでしまおう。」

老人は滝の方角を見て小屋へ走ったかと思うと肩から縄を掛けて現われるや、惇の手を取り川の方へ下りはじめた。老人は走り出すと驚くほど早かった。背は曲っていたが

I

と惇を引いて駆けた。橋を渡って崖の道に入ると、

「大きな岩の下だな、滝の上の。丸い平らな岩の下だな、わしは先に行く。坊は後から来い。」

老人は惇の手を放すと、

II

遠ざかって行った。惇は遅れまいと後姿を追ったが左へ曲った崖沿

いの道で老人の姿は消えてしまった。

正作はまだ無事でいるだろうか。一枚岩を出てからもう随分と長い時間が過ぎた気がする。それが一時間なのか三十分なのか惇はわからなかった。正作がもし谷底に落ちて死んでしまったらそれは自分のせいだ。自分が早く人を呼んで来なかったからだ。蛇を恐れてうろろうろしていた臆病な自分が悪いのだ。冷たい谷底の岩の上に俯せたまま人形のように滝水に濡れている正作の姿が浮んだ。惇は走りながら首を振ってその幻を打ち消した。顔を真赤に脹らませて笑っている正作が現われた。大丈夫だ正作は生きている。しかし紅い顔は笑うのを急に止めると硬直して松の幹に必死のギョウソウで掴まっている表情に変わった。

「お願いだから助けて下さい。」

惇は誰に言うともなく叫んでいた。

走りながら何度も繰り返して助けを乞い続けた。左手に聳える青煙の頂きに、正作を死なせないで下さいと願った。

岩場に近づけば近づくほど惇の中に非情な深緑色の山の神様が襲って来て、背中をドン、ドンと叩いた。崖の赤土が切れて岩場が見えると、惇は不安に胸が詰まって息苦しくなった。

それでも足を止めないで一枚岩の下に着くと声を上げて正作を呼ぼうとした。でも黙って岩を周り、一枚岩の上へ駆け登った。

誰もいない。

惇は声を立てず耳を立てたが辺りには何も聞えなかった。急に膝と肩がぶるぶると震えはじめた。耳元が熱くなり口の中が乾いた。人の気配がしない。握りしめた手が汗ばんで指の間を濡らしていた。

すると左の下の岩の辺りから笑い声がした。笑い声は小さく聞えて途絶えたかと思うと前より大きな聞き覚えのある笑い声に変わった。正作の声だ。

「父ちゃん。」

惇は正作の名前を呼びながら声の方角へ走った。見下ろすと向いの岩場との狭間、流れが落ちる場所にある岩の上に、正作は笑いながら老人と座っていた。

「父ちゃん。」

見上げた正作が笑って惇を見た。

「おお、惇、手をかけたなあ。」

「父ちゃん。」

惇は心の中で、父ちゃん、ともう一度呼んで正作を見つめなおすと、鼻の奥の方がツーンと熱くなって咽の奥に鼻水の苦さが逆流し泣き出してしまっただった。でも泣くと正作に笑われる。必死になって笑おうとした。ズボンを握りしめその手で髪の毛を思い切り引っ張った。そして歯を見せるようにしてやっとならう

ことができた。にこやかな正作の顔を見ているとこぼれそうな涙がとまった。

正作は右腕をだらりと棒のように下げてその腕を傍らの水の中につけていた。左手で右手首を掴まえる
と持ち上げるように右腕を回した。正作の顔がひどいしかめ面になった。

「大丈夫かの。」

老人が心配そうに言った。

「筋がいつてもうたらしいです。」

「痛むかの。」

「たいしたことはないです。なあに、もう木にぶら下がることもないですし。」

「全くじゃ。えらい目のの。」

惇は岩を下りて二人のそばに行った。

「惇、何じゃ、川にでも落ちたか。」

正作に言われて下半身を見るとズボンはずぶ濡れだった。正作の無事な声を眼の当りに聞くとまた涙が出
そいで、

「う、うん。」

と言葉にならず首を横に振った。

老人は笑いながら惇を見て頷いた。正作が右手をまた水に入れると冷たい山水の中に髪の毛を落したよ
うに血がサツと流れた。水から上げた手の平を開くと親指の付け根から手首まで釘で搔いたような傷が見え
た。支えていた左手を二の腕からはずすと力こぶが肘の関節までズルンと下りて来た。正作は左手でその肉
塊を掴むようにして肩の方へ上げた。老人が首に巻いた手拭いで正作の肘の辺りを縛りつけた。惇は今落ち
た肉が何なのか分からなかった。

「筋が切れたかの。」

「うん、どうですか、まあさほど痛みません。造作もいらんでしょう。」

⑨「医者に見せた方がよからう。」

正作が先刻までいかに大変なことをしていたかを感じた。ふと、あの松の木を見ると一枚岩から下った老
人の縄が生き物のように揺れながら谷底へ垂れている。正作はあの間中ずっと片手であの松を持ち続けてい
たのだろうか。谷底を見て、正作の Ⅲ に惇は驚いた。岩肌
に崩れそうな土色の草が風に任せられ
たままざわめく。座った二人も崖を振り返って見つめていた。

「いやあ、えらい目に会ったのう。この辺りの山も、もう老じやからの。雨の上りっ端で、岩も緩んだんじや
ろう。」

正作は黙って頷いた。

「しかし何でまた、あそこに。」

「いやあ、ちよつと……。」

言いかけて自嘲するように左手で松の木の上方を指さした。

「あれをちよつと摘んで帰ってやろうと、色気を出したんで、山が怒ったんでしょう。」
見ると松の木の上の岩場に紅紫色の花が咲いていた。

「おお、あんなところに皐月じゃのう。」

老人は風に揺れる皐月の花をじっと眺めている。

「家の者が花好きで……いやあ、変な色気を起こすと山に叱られる。」

正作は気合いを入れて立ち上ると惇の頭をキュツと掴んでから尻をポンと叩いた。そのまま一枚岩の上へ歩くと左の腕を肩に寄せるように回した。老人も立ち上り結えた縄をたぐり始めた。惇は老人のそばに歩み寄って、

「おじさん。」

「何じゃ。」

「ありがとう。」

老人は目を細めて惇を見ると頷きながら、

「坊こそ、ようやくたのう。えらいぞ。」

そう言つてチラツと岩の上の正作に目をやって

「たいしたもんじゃ、坊の父さんは。あの身体をずっと手一本で支えとつたんじゃからのう。その辺の奴ならとうに手を離しとるわ。たいした人じゃ。えらい男じゃ。」

その言葉に惇は正作を見上げた。肩を広げた青煙の頂きよりもずっと正作の肩は大きく見えた。

⑩ 確かにそこに惇の正作が立っている。また、喜びが惇の胸の中で湧き起った。

(伊集院静「皐月」より)

※(注) 晴 惇の母親

青煙の生き物 青煙峠に生きる生き物のこと。

自嘲 自分をばかにすること。自分で自分をあざげること。

問一 線「ギョウソウ」を漢字に直しなさい。

問二 線①「青煙の生き物全てが惇に挑みかかっている。」とありますが、このような表現を使うことで何を効果的に表わしていると考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 父親を助けるために走る惇の前に現れた蛇を「青煙の生き物」の代表のように表現することで、蛇の恐ろしさを表している。

イ 惇の行く手をはばむ蛇の存在を「青煙の生き物全て」とすることで、惇がどれほど蛇を恐れているかを表している。

ウ 惇が蛇と戦うことをこのようにたどることで、自然の力の前には人間である惇の存在などちっぽけなものだということを表している。

エ 蛇もふくめて山全体が惇の行く手をはばんでいるように表現することで、惇が父親を助けることが簡単ではないことを表している。

問三 線②「老人は引き揚げてしまったのだろうか。」、③「それでも何度も呼び続けた。」とありますが、いったんは「老人は引き揚げてしまったのだろうか」と考えた惇が、まだ「老人」がいると思いい「何度も呼び続けた」のはどのようなことに気づいたからですか。それがのべられた一文を文中からぬき出し、その初めの四字を答えなさい。

問四 — 線④「早くしなければ。」とありますが、惇は何を「早くしなければ」いけないと考えているのですか。次の文の空らんにあてはまるように五字前後で具体的に答えなさい。

□□□□□
こと

問五 □□□□□ I・IIにあてはまる最も適当な言葉を次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

ア どんどん イ とことこ ウ てきはき エ スイスイ オ グイグイ

問六 — 線⑤「惇は走りながら首を振ってその幻を打ち消した。」とありますが、「その幻」とは何ですか。文中から過不足なくぬき出し、その初めと終わりの四字を答えなさい。

問七 — 線⑥「岩場に近づけば近づくほど惇の中に非情な深緑色の山の神様が襲って来て、背中をドン、ドンと叩いた。」とありますが、このときの惇の気持ちを表した言葉を文中から漢字二字でぬき出して答えなさい。

問八 — 線⑦「急に膝と肩がぶるぶると震えはじめた。」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 父親を助けた一心で走るうちに、道をまちがえてしまい遭難してしまったと考えたから。
イ だれもないということは、助けが間に合わずに父親が谷底に落ちてしまったと思ったから。
ウ 父親はともかく先に到着しているはずの老人もいないので、辺りが不気味に感じられたから。
エ 人の気配が感じられず、山奥でひとりぼっちになってしまったと思いきわなくなったから。

問九 — 線⑧「鼻の奥の方がツーンと熱くなって咽の奥に鼻水の苦さが逆流し泣き出してしまいそうだった。」とありますが、このときの惇の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 父親の命を救うためにがんばった自分をほめてもらいたいと考えている。
イ 父親の命の恩人となった老人に対して感謝してもしたりないと思っている。
ウ 父親を助けるために走り続けた自分の苦勞がむくわれたと満足している。
エ 父親が老人に助けられ無事であることを確認して心から安心している。

問十——線⑨「正作が先刻までいかに大変なことをしていたかを感じた。」について次の1・2の問いに答えなさい。

- 1 「大変なこと」とは何ですか。できるだけ文中の言葉を使って解答らんの「こと」につながるように二十五字以内でその内容を答えなさい。
- 2 「正作が先刻までいかに大変なことをしていたかを感じた。」とありますが、それは正作の体のどのような状態からわかりますか。それがのべられた一文を文中からぬき出し、その初めの四字を答えなさい。

問十一 Ⅲ にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を答えなさい。

- ア おそろしさ イ やさしさ ウ たくましさ エ 冷静さ

問十二——線⑩「確かにそこに惇の正作が立っている。また、喜びが惇の胸の中で湧き起った。」とありますが、このときの惇の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア けがはしたが父親が無事であったことに安心する気持ち。
イ 自分のおかげで父親の命が助かったことに満足する気持ち。
ウ 絶体絶命の危機を乗り越えた父親をほこらしく思う気持ち。
エ きびしい状況の中で父親が助かった事実がまだ信じられない気持ち。

問十三 この文章の内容に合うものを次のア～オの中から二つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 惇に助けを求められた木樵小屋の老人は、山道を力強い足取りで走り父親を無事に救い出した。
イ 正作が危ない目にあつたのは、崖に咲く皐月の花を取ろうとして山の神のたたりにあつたからだと惇は考えている。
ウ 木樵小屋の老人は、正作が助かった理由を、惇が勇気を出して蛇に立ち向かったからだとほめてくれた。
エ 正作は大きなけがを負ったことを周囲に感じさせないよう、いつも以上に惇に対しておしゃべりになった。
オ 惇は父親を助けるためにひたすら走りながら、もう間に合わないのではないかとという恐怖とずっと戦っていた。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

地球上での生きものの歴史を考える際に、[※]エポックメイキングと呼んでよい事柄がいくつかありますが、その一つに「生きものの上陸」があります。

① 38億年前に生まれた地球最初の生命体は、その後33億年間ずっと海のなかにいました。今からおよそ5億年前によく陸へ上がりはじめたのです。考えてみればこれは当然のこと。海には、生命の維持に大切な水はたっぷりあるし、太陽から降ってくる紫外線などの有害な光線も遮^{さか}ってくれますから。

なぜ生きものが陸に上がったのかよくわかりません。でも挑戦^{ちようせん}をしました。生きものが上陸しなかったら人間は生まれなかったわけですし、陸に上がったからこそ生きものは多様化し、空まで飛ぶようになりました。^②「上陸」という出来事は、生きものにとってきわめて重要なことだったので。

最初に陸に上がった生きものは植物です。植物は自然界の基礎^{きそ}ともいえる存在で、植物なくして生きものは生きていけません。最初に上陸した植物はコケやシダでしたが、今は樹高40mや70mといった高木もあります。^③よくよく考えると、これはすごいことです。たとえばマンシヨンの10階での水道は、エネルギーを使ってポンプを回し、屋上まで吸い上げた水を送っています。しかし、植物は動力を使わずに水を70mの高さまで吸い上げているのです。[※]「機械論的世界観」が人間社会を覆^{おほ}っていたときは、生きものがやっていることなんて「保守的で古いこと」と思われがちでした。しかし、たとえば魚類が水のなかから陸に上がってきて空を飛ぶようになる間に、生きものはどれほど新しいことに挑戦してきたことか……。そう考えると、生きものの進化の凄^{まじ}さがわかるのではないでしょうか。

私たちは5本の指がついた手を持っています。生きものが陸へ上がってきてから手ができたんですね。どうやって手ができたかを追いかけていくと、3億8500万年前に生息していたユーステノプテロンという魚のヒレのなかに、私たちの腕^{うで}の根元にあるものと同じ骨がありました。3億7500万年前のティクターリクになると、原始的な手首と考えられる小さな骨があります。さらに3億6000万年前のアカンソステガは初期の四足動物ですが、なんと指が8本もありました。

また、初期の魚類にはアゴがありませんでした。無顎類^{むがくゐい}と呼ばれています。私が研究をはじめた頃^{ころ}イタリアの教科書を読む機会があり、そこには「まず最初にアゴのない魚がいました。でも、アゴがなければ口のなかに流れ込んでくるプランクトンを食べるしかない。そこでアゴのある有顎類^{ゆうがくゐい}が出現します。アゴがあれば、自分で獲物^{えもの}を獲ることができます。アゴができたことで積極的に生きることになったのです。」と書いてありました。

それを読んだとき、初めて「アゴってすごいんだな。」と思いました。お腹がすいたら追いかけて行って、^④パクッと食べることができのですから。アゴを獲得^{かくとく}したことで、魚類の生き方そのものが大きく変わったのです。

アゴは、魚の体の前方にあるエラから生まれたもの。そして、魚のアゴの神経は、なんと私たち人間のアゴの神経とまったく同じなのです。魚の中でエラから神経ができてきてアゴになり、さらに現在の人間へと向かう進化がはじまったのです。

このように、生きものは新しいことにどんどんチャレンジして、自分たちの世界を広げてきました。20世紀は「機械と火の時代」でしたから、多大な火(エネルギー)を費^つやして、原子力発電所をつくりました。

コンピュータや携帯電話も急速に浸透しています。□、これは決して悪いことではありませんし、否定するつもりはありません。

しかし、地球の環境問題や福島第一原子力発電所の事故を目の当たりにすると、「機械と火の時代」のままでこの先も進んでいけるとは到底思えないのです。私は、21世紀は「生命と水の時代」にならなければいけないと考えています。21世紀は生きものと水についてよく考えたい。生きものがチャレンジしてきた工夫をもう一度探したい。そして、自然の一部である人間がそれをよく学んで、これまでとは違う角度から新しい技術をつくっていくことがとても大切だと思います。

人間は、生きもののなかでもっとも新しい存在です。しかし、味覚はチョウと同じ細胞を使っています。古いものを上手に生かしながら生きものは多様化してきたわけです。生きものに学ぶべきことは、とても多いと思います。

⑥ 機械と生きものの違いを考えてみます。

機械は「構造と機能」がわかればOKです。しかし生きものはそうはいきません。たとえばアリの理解しようと思ったとき、ア리를バラバラに分解しても本質はわかりません。そのアリはどのようにして今の姿になったのか。38億年の歴史とほかの生きものたちとの関係を読み解かない限り、ほんとうの意味でア리를理解したことはならないのです。

もう一つ付け加えると、機械はどれもキンイツにすることが大事ですが、生きものはどれだけ多様になるかが大切です。

追求することも違います。機械は利便性を追い求めますが、生きものは「つづいていくこと」(継続性)を重視します。生活がどんなに便利で豊かでも、人類という種が途絶えてしまったら意味がありません。「つづく」ということの意味を考える必要があります。

生きものの研究が、「生きているとはどういうことなのか」を調べていくには土台となる生命論的世界観が必要なのです。

生きものの一員として、自分がどう生きていくかを決めて、どういう社会をつくっていくと暮らしやすいかを考える。そして、その社会を実現するために必要な科学技術を考える——。⑧これが科学の本来の順序なのですが、今の社会は逆です。まず技術ありき。しかも技術の前に、経済ありきなんです。社会と生活と思想がないから「どう生きるか」という部分が抜け落ちていきます。

38億年前に生まれた小さな細胞からさまざまな生きものが生まれ、ときどき絶滅の危機に瀕したけれど乗り越えて、そうするうちに霊長類の仲間から二本足で立つちよつと変わった生きものHヒトが誕生しました。生きものは何千万種も存在しますが、ほかの生きものは人間のように高度な文明を持った社会をつくることはできません。

人間は、20世紀に大きなビルが建ち並び、その間を電車や自動車走り、飛行機が空を飛び、コンピュータに至るところで使われる、そういう社会をつくってきました。

人間が脳など独自の能力を生かしたことはとても重要です。だからこそ、このような社会をつくることのできたのですから。⑨それを否定しませんが、でも人間は自然の一部であることを忘れてはいけないのです。都市や先端技術といった文明社会だけでは、人間は生きられません。

今お話したような新しい世界観を支える言葉を最後にご紹介します。「愛づる」です。

この言葉は、平安時代後期の短編物語集『堤中納言物語』つつみちゅうなごんものがたりに収められている「虫愛づる姫君」という物語から拝借したものです。少し説明しましょう。

およそ1000年前の京都に、ちよつと変わったお姫さまが暮らしていました。男の子たちに虫をたくさん集めさせたうえ、1匹ずつ名前をつけてかわいがっていたのです。お姫さまのいちばんのお気に入りはお虫でした。「かわいい、かわいい。」と大切にしていた。だから「虫愛づる姫君」なのです。

※ 両親はちよつと困っています。このお姫さまは※裳着もぎを済ませたりっぱな成人（13歳くらい）なのですが、お歯黒※や引眉※といった当時の女性がしていたお化粧けしやうをまったくしないのです。両親が注意しても「人間はそのままの姿がいちばん美しいのだから。」と相手にしません。

あるとき、両親が毛虫をかわいがっているお姫さまに「そんなことばかりしていたらダメですよ。」と注意します。しかしお姫さまはこう言いました。「みんなはチョウになっただけかわいいと言ひ、毛虫のときは気持ち悪いと言ひ。でも、チョウになっただけ死んでしまうのだから、むしろ生きる本質は毛虫にあると思ひのです。」と――。

⑩ 「この姫君はすばらしい。」と思ひのです。日本文学の中なかでは変人と言ひわれていますが、生きものをよく見つめ、真剣しんけんに調べて、その本質をつかんだうえで自分の生き方を選択せんたくしているのです。これは現代に通じる世界観だと思ひます。

（中略）

1000年前からつづく、自然を大切にする日本の文化を受け継ぎながら、コンピュータなど新しい技術を生んだ20世紀も踏まえたうえで、新しい科学や科学技術をつくっていくこと。21世紀はともチャレンジな時代です。私はこのような新しい社会はできると思ひます。逆にできなければ、人間の未来はあまり明るくないでしょう。

⑪ 自分の体のなかには38億年にもおよぶ生きものの歴史が入っているという事実。それをベースにものごとを考へていく「生命論的世界観」を持つこと。それを忘れないで、日常生活を過ごすようにして下さい。

（中村桂子）「私のなかにある38億年の歴史―生命論的世界観で考へる」
『科学は未来をひらく〈中学生からの大学講義〉3』より）

※（注）エポックメイキング ― 画期的な出来事。

機械論的世界観 ― 機械などの物質が世界の中心であるという考へ方。

生命論的世界観 ― 人間などの生命が世界の中心であるという考へ方。

霊長類 ― 人類とサル仲間。

裳着 ― 昔の女子の成人の儀式のこと。

お歯黒 ― 歯を黒く染めること。

引眉 ― まゆ毛をそったあとに、まゆ墨ずみでまゆを書くこと。

問一 ― 線「キンイツ」を漢字に直しなさい。

問二 ― 線①「38億年前に生まれた地球最初の生命体は、その後33億年間ずっと海のなかにいました。」とありますが、「地球最初の生命体」が「ずっと海のなかにい」たのはなぜですか。答えとなる部分をふくむ一文を文中からぬき出し、その初めの三字を答えなさい。

問三 ——線②『上陸』という出来事は、生きものにとってきわめて重要なことだったので。」とありますが、どのような点で重要なことだったのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 海よりも太陽のほうが利益を与えることがわかったという点。
- イ いろいろな種類の生きものが生まれることになったという点。
- ウ 全ての生きものが陸で生活できるようになったという点。
- エ 陸上には有害な紫外線しがいせんが無いということに気づけたという点。

問四 ——線③「よくよく考えると、これはすごいことです。」とありますが、これについて次の1・2の問いに答えなさい。

- 1 「これ」が指し示す一文を文中からぬき出し、その初めの三字を答えなさい。
- 2 「これ」が「すごい」ということを具体的に説明している部分を解答らんの「こと」につながるように文中から三十字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問五 ——線④「アゴを獲得かくとくしたことで、魚類の生き方そのものが大きく変わったのです。」とありますが、「魚類の生き方」はどのように変わったのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 色々なエサをおいしく感じられるようになった。
- イ 自分で獲物えものを獲とることができるようになった。
- ウ 神経が発達して人間へと向かう進化を始めた。
- エ プランクトンを食くべることができなくなった。

問六 文中の□にあてはまる言葉として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア さらに
- イ つまり
- ウ あるいは
- エ もちろん

問七 ——線⑤ 『機械と火の時代』 のままでこの先も進んでいけるとは到底思えないのです。」とありますが、筆者はこの先どのようにしたほうが良いと考えていますか。次のア～エの中から適当でないものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 今ある技術にとらわれず、今までとは違う角度で新しい技術をつくる。
- イ 人間も、他の生きもののように自然の一員として生きているということを見つめる。
- ウ コンピュータの技術を発達させ、原発事故が起きないようにする仕組みをつくる。
- エ 生き物が古いものを上手に生かしてきたように、人間も生きものの工夫を学ぶ。

問八 ——線⑥ 「機械は『構造と機能』がわかればOKです。しかし生きものはそうはいきません。」とありますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 機械は「構造と機能」がわかれば同様なものを作ることができるが、生きものは「構造と機能」がわかっても同じ生きものを生み出すことはできないから。
- イ 機械は「構造と機能」がわかれば分解できるようになるが、生きものは体の構造がわかっただけでは分解することができないから。
- ウ 機械は「構造と機能」がわかれば本質を理解したことになるが、生きものは進化の歴史や周りとの関係を考えなければ本質を理解したことにならないから。
- エ 機械は「構造と機能」がわかれば誰でも使うことができるようになるが、生きものはその習性がわかっても人間の思い通りにはならないから。

問九 ——線⑦ 「生きものは『つづいていくこと』（継続性）を重視します。」とありますが、「つづいていくこと」とはどういうことですか。できるだけ文中の言葉を使って、十字以内で説明しなさい。

問十 ——線⑧ 「これが科学の本来の順序なのですが、今の社会は逆です。」とありますが、科学は本来何を出発点にしたほうが良いと筆者は考えていますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 生きものの仕組みを知りたいと思う好奇心。
- イ 技術をどれくらい進歩させるかという目標。
- ウ どうすれば人間が長生きできるかという問い。
- エ 自分がどのように生きていくかという考え。

問十一 —— 線⑨ 「それ」とはなにをさしますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 人間が他の生きものより優れた頭脳を使って、高い科学技術を持つ社会をつくりあげたこと。
- イ 人間が生きものの一員として、自然界にとけこんで生活できる社会をつくりあげたこと。
- ウ 人間が他の生きものの工夫を取り入れ、新しい科学技術を持つ社会をつくりあげたこと。
- エ 人間が多くの生きものをおしのけて、人間にとって便利な社会をつくりあげたこと。

問十二 —— 線⑩ 「『この姫君はすばらしい。』と思うのです。」とありますが、作者はなぜ姫君のことをすばらしいと思ったのですか。解答らん「から」につながるように文中から四十字以上四十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問十三 —— 線⑪ 「自分の体のなかには38億年にもおよぶ生きものの歴史が入っているという事実。」とありますが、これはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 生きものが進化してきた過程を知識として知っているということ。
- イ 多くの生きものが生きてきた工夫の積み重ねとして自分が存在するということ。
- ウ 文明社会を作り上げた人間の知識や技術を受け継いでいるということ。
- エ 多くの生きものが生きてきた歴史が、脳に記憶されているということ。

問十四 筆者の考えとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 21世紀は20世紀の技術があまり発展しなかったことを反省し、科学技術の向上に全力を注ぐ社会を目指すべきだ。
- イ 21世紀は20世紀に生まれた技術を捨てて、方向性を改めて自然と人間が共存できる社会を目指すべきだ。
- ウ 21世紀は20世紀の技術の発展によって生まれた問題点を反省し、それより以前の自然豊かな社会を目指すべきだ。
- エ 21世紀は20世紀に生まれた技術を生かしながら、自然を大切にしたい新しい科学技術を生み出す社会を目指すべきだ。

三 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～④の——線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

- ① 海からシオカゼが吹く。
- ② 彼はイチョウが弱い。
- ③ 私のクラスには動物ハカセがいる。
- ④ ボクジョウには馬がたくさんいる。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 動物保護を唱える。
- ② 期限を設ける。
- ③ 長い年月を経る。
- ④ その都度用意する。

問三 次の①～④の四字熟語の□にあてはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。また、その四字熟語は後の例文ア～エの()のどれにあてはまりますか。最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① □ 光石火
- ② 日進□歩
- ③ 一心不□
- ④ 起□回生

- ア 九回裏で()のホームランを放ち、チームは逆転勝利をおさめた。
- イ 彼は柔道の大会において、()の早わざで見事一本勝ちをおさめた。
- ウ ようやく見えてきたゴールに向かって、()にペダルをこいだ。
- エ 戦後の東京は()で発展し、もうむかしのおもかげは見られない。

問四 次の①・②の文の——線と同じ使い方をしているものを後のア～エの中からそれぞれ一つ選び、その記号を答えなさい。

① カレーはからいのが好きです。

ア これは君のですか。

イ 森の静けさに心が休まる。

ウ さくらの咲くころにまた会いましょう。

エ 明日は山に登るのですか。

② 明日の天気のことばかり気になっている。

ア 赤ちゃんは泣きださんばかりに顔を真っ赤にした。

イ まだ終わったばかりで実感がわかない。

ウ ネコはいつもねてばかりいる。

エ 休んだばかりにチャンスのをがした。

問五 次の文の□の部分^アが直接どこにかかっているかを、同じ文中の——線ア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

北国では風が^アとても^イ冷たく^ウ吹くので、^エ寒くてしかたが^エなかった。